

武村陽子著

『スペイン 世界遺産と歴史の旅』

(彩図社、改訂版、2014年)

評者 坂東省次

本書『スペイン 世界遺産と歴史の旅』には「プロの添乗員と行く」の冠が付く。プロの添乗員とは著者の武村さんのこと。「はじめに」で「個人的な話で恐縮ですが、私はスペインが好きで、ツアーの仕事やプライベートですでに50回くらい訪れています。」と述べているように、武村さんはプロ中のプロのようだ。スペインなら隅から隅まで知り尽くしているのだろう。本書を読んでいてそんな印象を受ける。武村さんのスペインツアーに参加すれば、きっと楽しいスペイン旅行になるのではないだろうか。

スペインと言うと従来、南部のアンダルシア旅行が中心であったが、20世紀末あたりからバルセロナにガウディありの時代が始まり、スペイン旅行の中心がバルセロナに移ったように思われる。

本書も例に違わず、「スペインで一番の人気スポットと言えば、バルセロナのサグラダファミリアです。」と言って、バルセロナとサグラダファミリアで始まっている。建築中でありながら、2010年に教会として完成してからは観光客が増え続け、いまでは完全予約制となっているという。かつては完成までに100年はかかるといわれ、未完の建築物として広く世界に知られるようになったが、ガウディ没後100年にあたる2016年の完成が発表された。財政面のゆとりと材料にコンクリートを使い始めたことが、サグラダファミリア早期完成を可能にしたようである。

しかし、バルセロナ観光はガウディだけで終わるわけではない。歴史があり、多くの芸術家が巣立ったこの町はそれ自体が歴史博物館といっても過言でなく、バルセロナ(とその近郊の)旅は、魅力あふれる旅となる。

バルセロナの次の訪問先は、南部アンダルシアである。バルセロナから飛行機で約1時間半ほどでアルハンブラ宮殿で知られるグラナダに到着する。そこから旅はコスタ・デル・ソル、ロンダ、セビーリャ、コルドバへと続く。この地はかつてイスラム教徒が支配した土地、その

面影を今に伝えており、フラメンコ、闘牛、メスキータ、白い家など、エキゾチックなスペインが楽しめる。

南部の旅が終われば、AVE(スペイン新幹線)に乗ってよいよ首都マドリード、そしてその周辺のカスティーリャ・ラマンチャ地方とカスティーリャ・レオン地方を訪れる。カスティーリャはスペインの中心であり、スペインの歴史そのものである。

ガイドはマドリードをこんな風に案内するという。

「マドリードは、スペインの地図を見ると、ちょうど真ん中にあります。スペインのイベリア半島は海に囲まれています、実はものすごい山国でもあります。マドリードは内陸にあり、標高は655メートルもあります。これは、スイスの首都ベルンよりも高いのですよ。ヨーロッパで一番標高の高い首都です。人口は300万人を超えています。スペインは長い間、今日、午後から観光するトレドが首都でしたが、16世紀にフェリーペ2世という王様によってマドリードへ首都が移されました。」

本書改訂版では、最近人気のあるスペイン北部、ガリシア地方のサンティアゴ・デ・コンポステーラやバスク地方も紹介されている。

このようなスペイン各地の案内に加えて、本書が興味深いのは、ローマ時代に始まるスペインの歴史の記述ではないだろうか。

コルドバには巨大なモスク(メスキータ)があるが、「モスクを建てるのには資材が必要だった。アブドアルマンは西ゴート族のサンビセンテ教会を買い取って、それを壊し、その跡地に教会に使っていた資材でモスクを建設した」とか、あるいはまたおなじコルドバの「フデリーア(ユダヤ人街)には、他に、白内障の手術を初めて行った眼科医ガフェキンの胸像もある」など、興味深い事柄をいろいろと教えてくれる良質のガイドブックである。

ばんどう しょうじ(教授・日西交流史)